

# 伏見

世阿弥作

季	地	ワキ	前
は	は	シテ	藤原俊家
秋	山城	かぎはへの神	老翁
		前に同じ	男
		後	ツレ

「誓ひすぐなる神詣で。く。宮路や絶えせざるらん。

詞  
「そもそも是は藤原の俊家とは我事なり。さても和州春日の明神は。氏の神にて御坐候ふ程に。此度参詣仕り。七堂の順礼事終り。今は下向道なれば。宇治より川舟に乗り。伏見の社に参詣申さばやと存じ候。

道行

「朝日影。さすや三笠の山高み。く。佐保の川

霧立ちこめて。梢の秋も猶深き。四方の詠めも時めきて。猶行く末は泉州。河風さむみ宇治の里。過ぐれば是ぞ程もなく。伏見山にも着きにけり。  
く。

シテ、ツレ一声

「異色はしをるゝ露の翁草。花ひとりなる氣色かな。

ツレ  
「是も山路の秋なれや。

二入  
「伏見の沢の秋の水。

シテサシ

「それ世界に於て国の数。其品多き人界なれども。

二人「生まれて安き瑞穂の国。海原や波静かなる八島潟。

天照神の御末を受け。代々の天皇国を治め。民静  
かなる我等までも。皆朝恩の故ぞかし。殊更にこゝ  
は所も九重に。近き伏見の宮造り。古きにかへる  
政事。道ある御代の其ためし。唯然るべき時とか  
や。

下歌「幣取り持ちて手向草。いく年々の秋ならん。

上歌「すべらぎの。万代までにまさり草。く。盛り栄

ゆく御影山。誰も頼みをかけまくも。かたじけ  
なしや民として。そら恐ろしき地の恩。又天の恐  
れ数々に。漏るゝ事なき此君の。幾久しきも限ら  
れず。

ワキ詞

「如何に是なる老人。御事を見れば柴取りやらんと  
見る所に。まことに盛なる白菊の。異なる花の種  
と見えたり。此花の在所ゆかしくこそ候へ。

シテ詞「さん候此白菊は。伏見山の谷水の辺に候ひしを。

神に手向の為めに手折り持ちて候。

ツレ

「うたてやな所からなる花と申し。しかも老人が持  
ちたる花なるを。などや翁草とは召され候はぬ。  
御心なきやうにこそ候へ。

ワキ

「實にく菊をば翁草とも申すとかや。又所からな  
る花と申すは。此伏見の里に翁草を。よみたる在  
所の有るやらん。

シテ

「いや此伏見の里を。必ず歌人のよみたる在所にて

はなけれども。昔し伏見の翁と云ひし人。一花を  
捧げ此伏見山に出来す。彼翁國の助けとなりしよ  
り。世上に於て其名を得たり。

ツレ  
シテ  
「其上伏見の翁の事。禁裏雲井の上人こそ。尤知し  
召さるべけれ。

ツレ  
シテ  
「古ヘ桓武天皇の。此伏見の里に宮作りせしに。翁  
一人顕はれいでゝ。一首の歌を申し、かば。帝叡感  
甚しくして。伏見の翁と召されしより。

ツレ  
「されば昔の伏見の翁の。嘉例に任せて此里に。

シテ  
「今もかはらで此尉が。よし有り顔に持ちたる花を。

二人  
「翁草とは召されずして。唯白菊と御覽ぜば。せめ  
てはまさり草となりとも。など御賞翫なかるら  
ん。

ワキ  
「實にや名所に住む人とて。世の常ならぬ心言葉。  
理すぐる有様なり。そも此花を手向とは。如何  
様當社の為めなるべし。いで此宮居はいづれの神  
ぞ。

シテ  
「是は桓武の御願所。伊勢の御札の宮居とて。御名  
も替はらぬ靈社なり。

ワキ  
「實にく聞きしにかはらずして。粧ひ異なる宮柱  
の。

シテ  
「鳥居も朱の玉垣に。

ワキ  
「玉の村菊立て添へて。

シテ  
「神前に捧ぐる手向草の。

ワキ 「其草の名も。

シテ 「尉が名をも。

地 「白菊の。花や伏見の翁草。／＼。白木綿添へて小  
忌衣の。宜禰ミタニが立ち舞ふ粧ひ。神感にたへぬ納受  
も。さぞなと思ふ夕神樂。夜を待つか月の都人。  
まづ御神拝候へ。／＼。

ワキ詞 「猶々伏見の翁の事委しく御物語り候へ。

地クリ 「そもそも伏見の翁の事。名も久方の天照らす。神

の代よりの末受けて。君道を守るためしとかや。

シテサシ 「然れば人皇代々を経て。時雨降り置ける檜の葉の。

地 「名におふ宮路正しくて。移り行くなり雲の上。花  
の都の春の空。平安城に治まれり。

シテ 「中にも伏見の宮作り。

地 「國家を守る神心。知るや阿古根の浦までも。四海  
の波は静かなり。

クセ 「人皇五十代。桓武天皇の御宇かとよ。当国伏し見

ての。里に移らせ給ひて。大宮作り始めつゝ。皇居を定め給ひしに。伏見の翁は顯はれて。いざこゝに。我世は経なん菅原や。伏見の里の荒れまくも惜しと。詠めけるとかや。其後巫に託しつゝ。猶重ねての詔。我は神風や。伊勢の阿古根の浦の波。治まる御代の為めならん。伏見に見そなはして。君辺に住むべしとの。御神勅に任せつゝ。大宮作りし給へり。

シテ  
「そもそも伏見といふ事は。

地  
「まづ我朝の総名にて。伊奘諾伊奘冊の。天の岩座の苔庭に。伏して見てし國なれば。伏見と名づけ給ふなり。さればにや。国富み民豊かにて。誰も我世に合竹の。伏見の里を。守らんとの御誓ひ。百王万歳に。平の都なるべし。

「實にや伏見のいにしへの。く。神の祭の夜神樂に。心を述ぶる有難や。

シテ、ツレ  
「折節月晴れて。和光の影も明らけき。いにしへの

宮はじめ。伏見の夢をおぼすなよ。

地 「夢の伏見の宮はじめ。其代を今に顯はして。

二人 「磨き添へたる玉殿に。

地 「今の翁の。

二人 「立つと見れば。

地 「天より金色の光りさして。此庭に満ちくて。伏見の里の。あれまくも惜しと思ふ故。又宮作り改めたり。私は伏見の翁なるが。御代を守り申すなり。君は千代ませ千代ませと。申し捨てゝ失せにけりや。申し捨てゝ失せにけり。(中入)

ワキ歌

「受くるや神の御心を。く。白木綿花の色々に。神楽の鼓声すみて。月も異なる今宵かな。く。

後ジテ

「あら有難の宮作りや。我をば誰とか思ふ。御代を守りの聖賢には。伏見の翁と顕はれ。神道にては伊勢の海。阿古根の浦に宮居して。古今妙文の詠

をのべん。かざはへの神とは我事なり。

地「実に有難や今宵しも。空晴れ雲も收まりて。明々  
とある夜神楽に。

シテ「焚くや庭火も照り添ひて。重なる霜の木綿畳。

地「満てるや花も村菊の。

シテ「紫の雪。

地「緑の空の。

シテ「月澄むや伏見の沢の秋の水。

地「竹田も見えて稻葉の雲の。  
シテ「深草の野ベ稻荷山の。

地「紅葉の秋も柳桜の。花の都は曇りもなく。見えた  
りくや。平安城のおもしろや。

ロング地「早曙の天の戸に。光りを添へて有明の。月澄み渡  
るめでたさよ。

シテ「もとよりも。我代は経なん菅原や。く。伏見の  
里を守らんと。又此山に顕はれ。伏見の翁なると

かや。

地 「実に有難き神の代の。昔を今にかへすなる。

シテ 「其海原の波の露。

地 「こりかたまりし種なれや。

シテ 「今もゆるがぬ秋津根の。

地 「其神の代の。

シテ 「物語り。

地 「伊奘諾伊奘冊の。岩枕に臥して。見出だしたりし

故に。伏見と此国を。名づけそめられし神の代の。

跡明らかに今まで。天下泰平の政事。絶えぬ伏見  
の翁草の。雪を廻らすや舞の袖。万歳の御代にか  
へらん。く。